

2021/05/01 公開



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL) ■ユダヤ入門シリーズ■  
#20 「サバイバルのための究極の選択～カトリックへの改宗」

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第20弾！パチパチパチ！  
塵も積もれば山となる！20回まで来ましたね。お付き合いいただきましてありがとうございます。  
今日はスペインのユダヤ人について、前編と後編に分けてお話ししたいと思います。

皆さんは“隠れキリシタン”という言葉聞いたことがあると思います。  
江戸時代に入って、徳川家康はキリスト教禁教令を出しました。これは非常に厳しい取り締りで、特に島原の乱が起こると、この取り締まりが本当に厳しくなって、もう徹底的にキリシタン撲滅運動が始まったのです。

ところが、仏教に改宗したように見せかけておいて、実は内緒でキリシタンの集まりをやめなかった、すなわち、キリスト信仰を棄教したと偽装工作した信者たちがいたんです。  
この人たちが 隠れキリシタン と言われました。見かけ上は仏教徒のようで、実はキリシタンの人たち。

日本に隠れキリシタンがいたように、ヨーロッパに“隠れユダヤ人”と言われた人たちがいたんですね。特にスペインに多かったんです。中世ヨーロッパの隠れユダヤ人。カトリックの強制改宗に応じてユダヤ教をやめたように見せかけておいて、実は、中身はユダヤ教のまんまだったと言われている人たち。

なぜそんなことが起こったのか？ そうでもしないと、そこに住み続けることができなかつた。生き延びることができなかつた。サバイバルのために、ユダヤ教棄教を偽装工作していたユダヤ人たちがいた。改宗ユダヤ人の中には、本当に改宗した人もいるし、改宗させられた人もいるし、形だけの人もいたんですけど、今日はそのお話をしたいと思います。

さて、中世は十字軍の時代でしたね。十字軍が大暴れした時、ヨーロッパのユダヤ人たちは このカトリックの迫害を逃れて東ヨーロッパに逃げました。集団移住するんですね。  
というのは、ヨーロッパの西側から東に向かって軍隊がブワッと押し寄せて、その途中にあったユダヤ人共同体は全部めちゃくちゃにされたんです。

しかし、十字軍の最終目的地はエルサレム。中東です。なので、東ヨーロッパまで逃げたら、さしもの十字軍も追いかけて来ないんですね。仮に追いかけて来たとしても、東ヨーロッパには東ヨーロッパの王様がいるわけで、「なんで勝手に国境越えて入ってくんねん！」となるので守られますね。  
今日（こんにち）、特に20世紀前半まで、東ヨーロッパにたくさんのユダヤ人がいたのは十字軍の名残りだと言えると思います。

では、東ヨーロッパに逃げるできないユダヤ人たちは、どのようにして生き延びたんでしょう？  
東ヨーロッパから最もはるかかなたのヨーロッパは、ヨーロッパ西側の最果ての地 イベリア半島です。イベリア半島に入ると長い川/エbro川が流れています。エbroはギリシア語ですが、これをラテン語にするとイベルス川。これから派生して、イベリア半島と言ったんですね。  
この川を超えずーっと西端全部イベリア半島。

ここに中世時代 ヨーロッパで最も多くのユダヤ人が住んでいました。  
ヨーロッパの他のどの場所よりも居心地が良かったからです。なぜ居心地が良かったのか？

イベリア半島はヨーロッパ大陸にありながら、800年間イスラム帝国だったんです。  
7世紀に始まるんですが、7世紀はイスラムの世紀です。7世紀にイスラムが勃興してあっという間に、東はアフガニスタンから西はモロッコまで全部イスラム帝国。支配権を確立しました。

そして、ジブラルタル海峡を越えてヨーロッパ大陸に上陸し、イベリア半島はすっかりイスラム帝国の支配下に置かれたのです。イスラム帝国がイベリア半島に来たのは8世紀初めで、そこから約800年間イスラムの国が続きます。イスラムの国ができた後、ユダヤ人が大変優遇されたのは既にお話しました。

ところで、イスラムの国がイベリア半島にできる以前、イベリア半島にはどんな国があったんでしょう？  
西ゴート王国（ゲルマン民族・ヨーロッパ人の国）です。西ゴート王国はカトリックの国で、イスラム帝国に滅ぼされるのが711年。

しかし、一旦イベリア半島から追放されたヨーロッパ人たちが、800年掛けて少しずつ反撃して領土を取り戻し、とうとう1492年、イベリア半島からイスラムの国を全部追放するのに成功しました。  
これをレコンキスタと言います。“1492年（一糸乱れぬ国造り）、レコンキスタ”と覚えてもらいたいですね。  
西ゴート王国のイスラムを追放してヨーロッパの国を造った。それがスペインとポルトガルです。

さて、イベリア半島に向かって徐々に進んで行くヨーロッパは、そこにいたアラブ人とユダヤ人に出会ったんですが、両者の見分けがつかなかったんです。外見似てたし、服装同じだったし、喋ってる言葉も同じだったから。だから初めは、ヨーロッパの人たちは両方とも殺害していったんですね。

ところがヨーロッパの王様たちは、イスラム帝国におけるユダヤ人の役割を知るようになって考えを改めます。「ユダヤ人というのは、殺害するより味方に付けたほうが得やぞ。」  
というのは、ついこの間までイスラム帝国に仕えて政権中枢にいたわけで、その長所も弱点も知り尽くしているんですよ。味方に付けたほうがいいじゃないですか。

それに彼らは知識階級で、様々な科学技術やアイデア・スキルを持っていたんですね。  
「これから新しい国をイベリア半島に造って行こうとする時に、彼らの知恵を借りるのは素晴らしい。得難い人材だ。」それでユダヤ人をアラブ人と区別し、優遇するようになっていきました。

そして、ユダヤ人を公式に王家や政治中枢に入れるために、「あんたらな、もうそろそろユダヤ教やめて、カトリックに改宗したほうが、長い目で見たらええんとちゃう？」改宗を強かに勧めるようになるんです。ある時は暴力を使う。ある時は脅し、ある時は特権を与える。飴と鞭。  
そのように誘い出し、たくさんのユダヤ人がユダヤ教を棄ててカトリックに改宗しました。

改宗に当たって最も葛藤があったのは一世ですよ。彼らは内面がもう苦しかったと思いますねえ。  
だけど二世三世になるにつれて、前例を受け継ぐ形なので、抵抗がどんどん小さくなって行くんですね。

このユダヤ人改宗者のことをスペイン語でコンベルソ。改宗者という意味。  
ヘブライ語ではアヌシム。強制された人々・強いられた人々という意味。  
動詞はアヌス。レイブされることなんですね。つまり、強制改宗は精神的レイブと同じことなんです。

しかし、改宗者にはもう1つ呼び名がありました。マラノーという言葉です。これはスペイン語で豚。豚はきれいな動物ではありませんよね。“汚（けが）れているもの” という意味があるのです。改宗を強く勧めたにもかかわらず、改宗ユダヤ人たちはマラノーと呼ばれた。これは明らかに蔑称です。軽蔑の気持ちがこもった言葉なんですね。

このようにして中世のスペインでは、ユダヤ教からカトリック・キリスト教に改宗した人、或いは改宗させられた人たちがたくさん出たんです。しかしこれは、スペインのユダヤ人に空前のチャンスを与えることになったんですね。

ユダヤ教を棄ててカトリックになった以上、もはやユダヤ人差別から解放されるということですよ。それでスペインの改宗ユダヤ人たちは、スペイン貴族の中でも選り抜きの貴族たちと婚姻関係を結んで、貴族の一員に加えられていきます。或いは、大公や国王の親戚になっていきます。また、国王たちの財政顧問・首席顧問のような非常に高い地位に就いていきます。そればかりか、カトリック教会の司教や大司教になる人までも出て来るんですね。

元々社会的能力や実力があり、かつ宗教的ハンディキャップがなくなった、そういうものを負わずに済むようになった改宗ユダヤ人は、水を得た魚のようにスペイン社会の中で大出世し、活躍し、成功していったのです。このスペインのユダヤ人をセファルディムと言います。

彼らは最初 黄金時代を築くのですが、これは長くは続きませんでした。後半部分については後編で紹介したいと思います。

長い話になりますが、お付き合いいただけたらなと思います。  
また、『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。それまで皆さん、さよなら！